

いし みなと 石港遺跡 弥生／古墳



石港遺跡 近景（日本海側から）



古墳時代前期の方形区画と建物群（西から）



古墳時代前期の石器製作施設



古墳時代前期の区画溝（幅が広い溝）



古墳時代前期の土師器

所在地：渡部地内
（信濃川大河津分水路河川敷）
調査期間：令和7年3～10月

調査原因：信濃川河川大規模災害関連
調査面積：3,972㎡（全体：19,342㎡）

どんな遺跡？

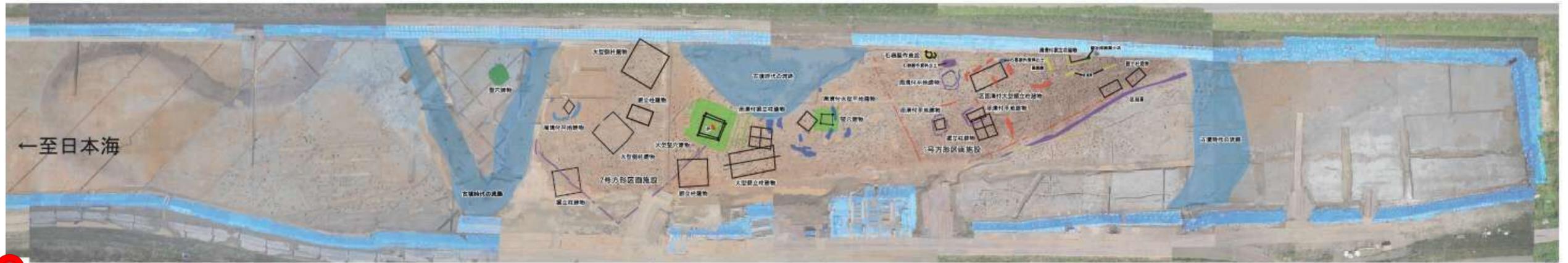
石港遺跡は、渡部地内の信濃川大河津分水路（以下「分水路」）右岸に所在し、日本海に面した丘陵地の内側で埋没丘陵と低湿地が接する沖積地に立地します。発掘調査は、分水路の改修工事に先立ち、令和4年度から開始し令和7年度に現地調査を終了しました。

調査の結果、石港遺跡は弥生時代中期（約2,100年前）から古墳時代（約1,700～1,500年前）の遺跡であり、特に古墳時代では、前期から後期まで約350年間、途切れることなく続く大集落であることが分かりました。このように長く継続した遺跡は新潟県内及び周辺地域でも稀で、石港遺跡の大きな特徴です。

古墳時代前期には、集落内に柵や塀で方形に囲う施設（方形区画）を設けてこれに沿うように建物を配しており、地域を統治する有力者が営む首長居館と考えられます。後期になると方形区画は無くなりますが、計画的に配置された建物群や多量の須恵器などから引き続き有力者が存在したと推測されます。

西日本や東北など遠隔地域の特徴をもつ土器が多く、紡織や鍛冶など手工業に関する道具の他、石器製作跡も確認されました。また、集落際に存在する自然流路からは、建築部材や刀装具、農具など大量の木製品が出土しました。

石港遺跡は、日本海から越後平野への玄関口として交通の要衝となるこの地で、様々な生産活動を行いながら政治や交易の面で重要な役割を担っていたと考えられます。



石港遺跡の主な遺構の配置状況

至信濃川・長岡→

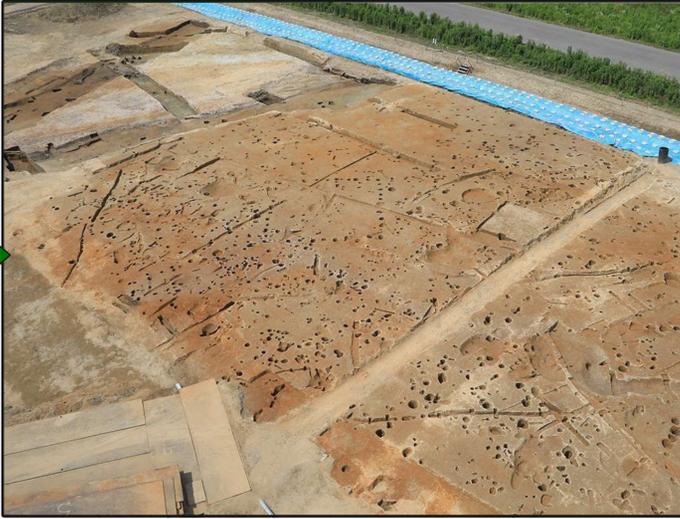
凡 例	
■	古墳時代中期後半～後期の遺構
■	古墳時代中期前半の遺構
■	古墳時代前期末～中期初頭の遺構
■	古墳時代前期後半の遺構
■	古墳時代前期前半の遺構
■	古墳時代の旧道路

【古墳時代前期初頭】



古墳時代前期の周溝付大型平地建物

【古墳時代前期後半】



古墳時代前期の2号方形区画

【古墳時代中期】



古墳時代中期の大型竪穴建物

【古墳時代後期】



古墳時代後期の壁立式建物

前期初頭には、低地と集落（居住域）を分けるように微高地のへりに溝を設けます。集落には大型の平地建物を中心に小型の平地建物や掘立柱建物が建てられます。建物の周りには円形にめぐる溝を設けるなど建物の形状は円形を基調としています。

前期の後半には柵や塀による方形の囲郭施設（方形区画）が造られ、集落の景観が様変わりします。建物は方形基調となり区画の方向に合わせて建物が配置されます。また、中核となる大型の掘立柱建物にはさらに溝で区画するものがあります。方形区画の内外には大きさや構造の異なる建物が多く存在しますが、方形区画内外でどのような役割の差があるのか今後の検討が必要です。

中期には方形区画が無くなり、建物は平地建物から竪穴建物が主体となり、後期になると壁立式建物が建てられるようになります。時代とともに主要な住まいの形態が変わっていきませんが、中核となる大型の建物とそれをとりまく小型の建物という建物の構成は変わらない様子がうかがえます。



古墳時代の建物
（滋賀県 穴太遺跡の集落復元模型）



杭列 (SR822)



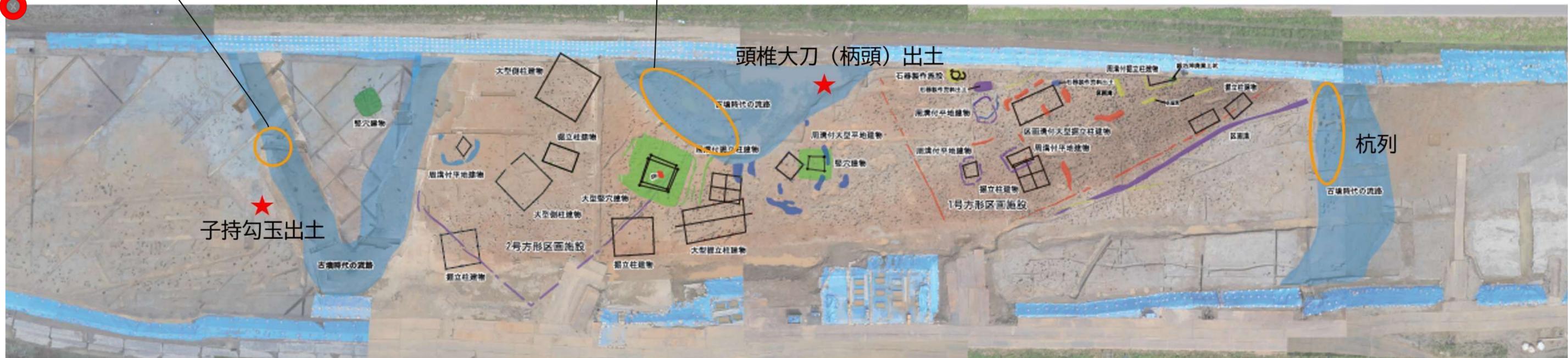
川跡 (杭列)



櫂 出土状況



木製 頭椎大刀の柄頭



石港遺跡の主な遺構の配置状況

石港遺跡の集落際には、蛇行する自然流路があります。流路からは、土器の他に大量の木製品が出土しました。多くは建築部材と考えられる板材、木柱、杭などであり、検出した遺構（溝や柱穴）と合わせて検討することで、建物の復元に役立つものと考えられます。他に、鍬や竪杵などの農具、櫂など水運に関するもの、漆塗りの弓、頭椎大刀の柄頭といった祭祀や威信具と思われるものなど様々です。

古墳時代後期の流路では、護岸もしくは流路内での作業施設と考えられる杭列を検出しました。また、この自然流路は旧早向川と推定されます。早向川は、国上山から南下して現在は分水路に注いでいますが、本来は平野を東の内陸方向へ進み西川に合流した河川です。

石港遺跡では、日本海に近いこの地で河川のそばに集落を築き、河川を生活用水や農業用水、そして水運に利用して、日本海路とつないだ内水面交通による物資や情報伝搬の拠点として機能したことがうかがえます。



様々な木製品

石港遺跡の道具たちーものづくりと祈りー



古墳時代中～後期の須恵器



土師器（搬入品や模倣土器）



スクレイパー

続縄文土器

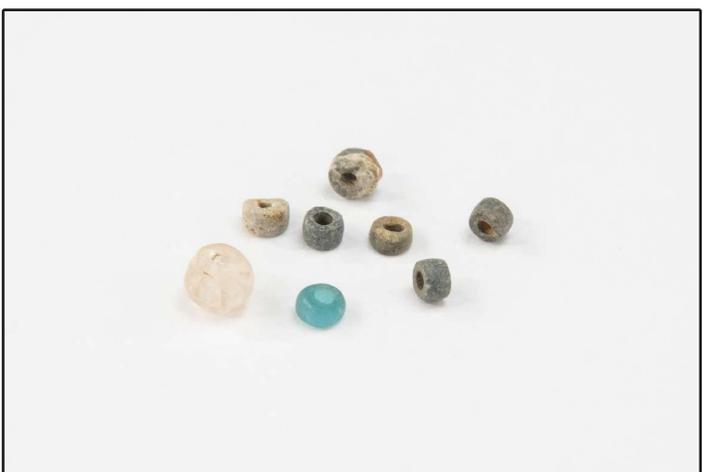
スクレイパーと続縄文土器



鞆の羽口

砥石

鉄製品・鍛冶関連遺物



水晶玉・ガラス小玉・白玉

弥生時代から古墳時代の様々な暮らしの道具が出土しました。

弥生時代では、中期の北陸系土器や後期の東北系土器の他、^{くだ}^{たま}管玉などが出土しました。全体の割合としては多くありませんが、弥生時代中期（約2,100年前）から人々がしっかりとこの地に息づいていたことが分かります。

古墳時代前期には山陰・瀬戸内地方や畿内といった西日本の特徴をもつ土器や北海道や東北地方に分布する^{ぞくじょうもん}続縄文土器が多くあり、中期以降では、当時まだ新潟県内で生産されていない須恵器が県内最多級に出土しており、他地域との活発な交流がうかがえます。

また、皮なめしに使用したとされる石器（スクレイパー）や糸を紡ぐための^{ぼうすいしゃ}紡錘車、鉄器を研ぐための^と砥石など、「ものづくり」に関する道具が数多く出土していることも大きな特徴です。一般に、古墳時代では鉄器が主流となり石器は使用されなくなりますが、石港遺跡では石器の製作・使用が確認されました。このことは、続縄文文化との密接な関わりを示すと同時に古墳時代における利器使用を考えるうえでも重要です。

さらに、勾玉をはじめとした様々な玉類、石製模造品が複数出土していますが、多くは祭祀に関連するものです。

石港遺跡の人々が、集落の中で盛んにもものづくりを行い、様々な場面で祈りの行為をする姿が目に見えます。



の おき なか おき
野沖遺跡/仲沖遺跡
 古代～中世／近世



野沖遺跡・仲沖遺跡 近景（東から）



野沖遺跡 B区完掘



野沖遺跡 B区 井戸状遺構



仲沖遺跡 C区 P413 木柱



野沖遺跡 B区 木製品

所在地：吉田吉栄地区

調査原因：県営ほ場整備事業

調査期間：令和7年6～12月

調査面積：野沖遺跡 1,290㎡
 仲沖遺跡 395㎡

どんな遺跡？

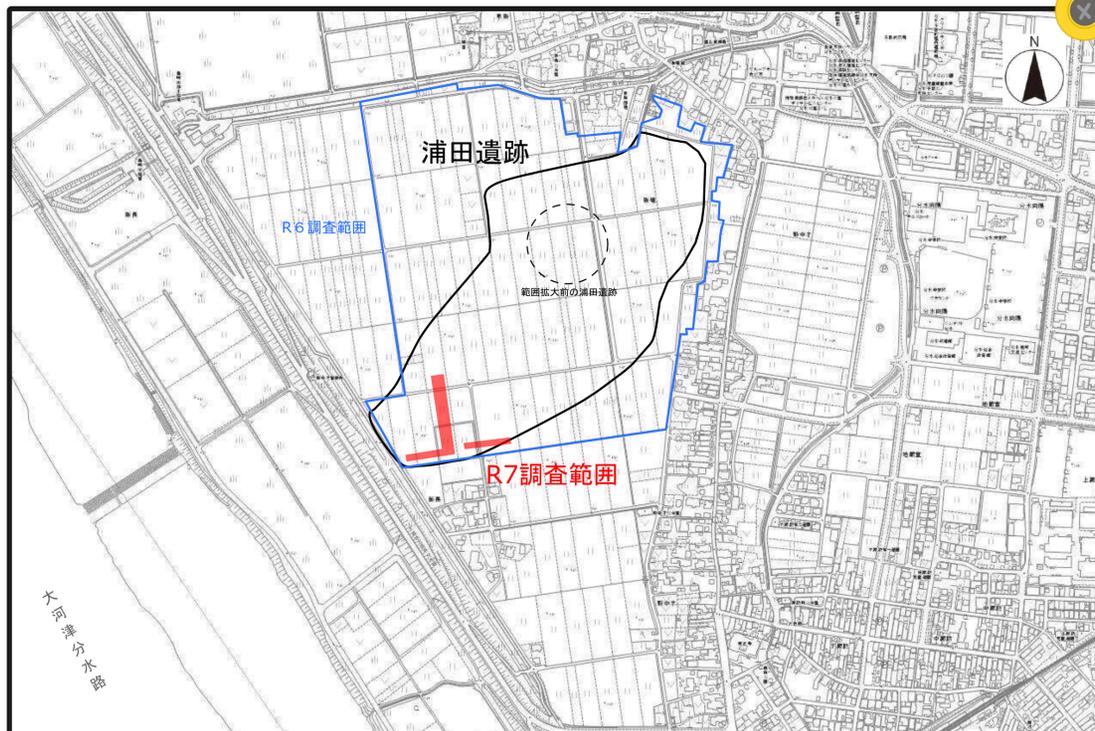
県営ほ場整備事業（富永・吉栄地区）に伴い、野沖遺跡の範囲内で2調査区（A・B区）、仲沖遺跡の範囲内で1調査区（C区）と計3地点を発掘調査しました。

仲沖遺跡は令和5年度に別地点で発掘調査を実施しており、そこは平安時代から中世にかけての集落跡だったことが分かっています。また、野沖遺跡では過去に「若」などと書かれた墨書土器が数点採集されており、当地に有力者が存在した可能性が示唆されています。

いずれも幅2mほどの調査区ですが、掘立柱建物とみられる柱穴列や、井戸・土坑・溝状遺構などを検出しました。遺物は、A区からは奈良～平安時代の須恵器・土師器や柱根が、B区からは鎌倉時代～室町時代の青磁・白磁・珠洲焼・土師器、木製品などが出土し、C区からは奈良～平安時代の須恵器・土師器などが出土しました。

9世紀から10世紀前半頃にかけては市域内の遺跡数が増加する時期ですが、野沖遺跡・仲沖遺跡をはじめ北東へ約1.5kmに江添遺跡群、北東へ約3.5kmの地点に中組遺跡が存在することから、古代においてこの地域は役人などが関わる生産・流通の要衝であったと考えられます。

うら た
浦田遺跡 弥生／古墳



浦田遺跡 確認調査位置図



T112 土層断面図



T2 土層断面図



T4 遺構検出状況



出土遺物の一部

所在地：野中才ほか

調査原因：大河津分水路改修事業
掘削土処理工事（分水西部地区）

調査期間：令和7年6月

調査面積：80m²

どんな遺跡？

大河津分水路改修事業（掘削土処理工事）の実施に伴い令和6年度に試掘・確認調査を実施した結果、これまで分かっていた浦田遺跡の範囲を中心に北東から南西にかけて帯状に遺跡範囲が拡大することが分かりました。ピット・土坑・溝状遺構・焼土遺構などを検出し、古墳時代後期に位置づけられる壺・甕・高杯といった土師器が数多く出土しました。古代の須恵器・土師器も少量出土したことから古墳時代後期を主体として古代まで続いた遺跡と考えられます。

今年度は、令和6年度に調査できなかった箇所（事業範囲の南西側）を追加で調査しました。結果、遺物の出土はありませんでしたが、少量ながら遺構を検出しました。遺跡は南東方向へは広がらず、南西方向へと続くようです。

市内で確認されている古墳時代の遺跡は数少ないですが、浦田遺跡の周辺には、南へ約2kmに五千石遺跡、北西へ約1.9kmに前期の前方後方墳と推定される竹が花遺跡、北西へ約2.5kmに首長居館とみられる石港遺跡が立地しています。当地域では古墳時代の人々が活発に生活していた様子がうかがえます。

おお こう づ ぶん すい ろ う がん
大河津分水路右岸
古墳／古代



試掘調査位置図



調査区近景 南東から



T7 土層堆積状況



T1 遺構検出面



出土遺物の一部

所在地：新長・野中才

調査原因：大河津分水路河川改修事業
(高水敷掘削)

調査期間：令和7年12月

調査面積：513㎡

どんな遺跡？

大河津分水路河川改修事業（高水敷掘削）の実施に伴い、試掘調査を行いました。

調査区は、新長集落と野中才集落南西の大河津分水路右岸河川敷に位置します。調査区と集落の間には、令和6～7年度に確認調査を実施した浦田遺跡が存在します。周辺に遺跡が分布することから、未発見の遺跡が存在する可能性があります。

調査の結果、南東側の堤防付近で遺構や遺物が密に見つかりました。遺構は、地表面から-1.5mで26～70cm幅のピット・土坑が検出され、-2.4mでも古墳時代と思われるピットが確認されました。遺物は、地表面から-1.3mで古代の土師器の破片が多く見られましたが、わずかに須恵器の甕や坏も出土しています。さらに地表面から-2.2mの黒色腐植粘土層からは、古墳時代後期の高杯の脚部が見つかりました。浦田遺跡でも同じ層が確認できることや出土した遺物の様子から、ここは古墳時代後期～古代にかけての遺跡であると考えられます。

今回の調査の結果、浦田遺跡の南西側に遺跡が存在することが分かりました。大河津分水路周辺には浦田遺跡や石港遺跡、五千石遺跡のほか長岡市の草薙遺跡など多くの遺跡が集中しており、交通の要衝とされる石港遺跡を中心としたこの地において、当時の関係性がうかがえます。